

その12 建仁寺垣に学ぶ

木林学

中川 典子



建仁寺垣作りは庭師の仕事
(京都市左京区下鴨・廣東
料理蕨庵)



圧迫感なく、やんわりと視線をさえぎる建仁寺垣(上)と、年月と丁寧な手入れを経て色つやを増した建仁寺垣



庭で飼われているウコッケイ。虫を食べて一役買っています

風薫る季節がきました。青々とした木々の息吹を感じます。京の歴は、一坪(三・三平方)の坪歴から社寺の壮大な庭まで、さまざまな趣きを持ち、豊かな自然のうつろいを感じる空間です。ただ植栽された土地があるというのでは違ふ、塀や垣根に囲われている中で、人が手を入れてこそ成り立つ景色といふものがあるのではないのでしょうか。

「庭は一生もの」心込め手入れ

風薫る季節がきました。青々とした木々の息吹を感じます。京の歴は、一坪(三・三平方)の坪歴から社寺の壮大な庭まで、さまざまな趣きを持ち、豊かな自然のうつろいを感じる空間です。ただ植栽された土地があるというのでは違ふ、塀や垣根に囲われている中で、人が手を入れてこそ成り立つ景色といふものがあるのではないのでしょうか。



それは、青竹を二寸四分(四十二)幅にして割り、たてに並べて半割竹で押さえた巨隠しの垣根。名前の由来は、建仁寺の創建当時(鎌倉時代)にこの形のものを作られていたからとされ、現

(鈴木善尚監)



次回は6月16日に掲載予定。



建仁寺垣の柱として使われているナグリ



ナグリ(名栗)とは、写真のように六角形にした木材(主に栗材)の側面にチヨウナツキノミ、ヨキという道具で研ったものを言います。今は、チヨウナツキノミを使うことが多いのですが、この道具、刃先が手前に向いていて、私がチャレンジすると脚を刺んでしまいそうに難しく変わった道具です。

名栗(縄文時代から続く木工技術)

斬る形は楕円、四角、矢羽根、波、竹節形など、用途に応じて異なります。数寄屋建築では障子形が一般的です。その加工の歴史は古く、縄文・弥生時代までさかのぼる小道具です。中世では、大きな板を挽いた後の仕上げとして見られたり、ヨキで製作を行いました。近代では丸太を伐採した際、運搬をやすくするために外側を削り縄をかけやすくとされたと言われていま

また、姫路城などの化粧梁や数寄屋建築の床柱、垂木、欄干、格子などの自然の風合いを生かした意匠にも見られます。栗材は節間が狭く、水濡にも耐え、遺跡などでも発見されます。その栗材を素材とする名栗。風合いと野趣あふれる栗目、垣根の柱として重宝を担うこととして